

八六 後醍醐院眞柱

昭和三年は恰も後醍醐院眞柱翁五十回忌に當り、鹿兒島市において、その祭典が史談會後援の下に舉行された。

翁が初めて江戸に出て平田篤胤の門に入つたのは、天保十年と傳へられてゐるが、日は六月の十九日で、當時翁は大河平彦次郎隆風と稱してゐた、元來薩摩人が篤胤の門に入つたのは、文政十二年に麗藩士木村休右衛門平鈴滿（後春秋滿）が、松平薩摩守家中大橋喜十郎（後彦太郎）平昌尙の紹介を以て贅を執るに至つたのを筆頭とし、次は、この昌尙、春秋滿二名の紹介で、天保二年に、法元六左衛門目下部御楯が入門し、次にこれ等の人々の紹介により、天保五年までに五名の入門者を見、次に同十年に翁の名を見るので、翁の紹介者の法元國端とあるのは、無論上記の御楯（國端は後の名敷）のことであらう、この年、翁三十五歳、篤胤六十四歳、昌尙四十歳、國端四十五歳。春秋滿はこの年三十八歳をもつて歿した、同十三年に翁は大山角

太郎源綱雄・和田孫右衛門平馨春を紹介して入門せしめ、その翌十四年に篤胤は歿したのであるが、篤胤門の薩摩人は上記の人々を算へるほか、いはゆる歿後門人として、名簿を捧げたるもの、弘化元年から文久三年までに四十二人を算へ、このうち三雲藤一郎藤原春彦・大脇佑九郎平棟臣の二名は翁の紹介するところである。

翁は最初篤胤に學ぶこと一年にして歸郷し、齊彬公の拔擢によりて造士館の訓導となり、助教となつたことゝいひ、且つ入門後四年にして篤胤の死に遇うたのであるから、師弟とはいへ殊に作歌の如きは、彼の子飼の門人の如き多くの影響を享けてゐないやうである、翁の歌集は有つたかも知れぬがいまだ見ないし、著述目録のうちにもそれらしいものがない、黒田清綱所編の「瀧のしぶき」には長歌と短歌が選まれてある、だいたい古調を帯びたさうして極突込んだ歌が多いやうに思ふ、逸話として有名な若木の櫻の戯歌の如き、或は詠史の歌におけるが如き、その特徴の發揮を見るに十分である。

祭典に際し、翁の遺墨展覧に、筆者の出陳したのは國分下總宛尺牘と短冊四葉とであつた。短冊は自分の好める詠史の歌と、翁には珍らしい描き繪のものである。

捨られし時に死になばいかにせむいきかひありし甲斐の國人

一谷懷古

あなかなしひよ鳥越の山おろし寒くましけむ御心思へば

鳥捕部萬

刀古々呂廼伊與々於伎多理止々理邊之與路豆與太可幾以左美於母倍盤

飛鳥山瀧の川の紅葉見に物しける時王子の酒亭にてよめる

から錦たゞまくをしも行秋はけふかあすかの山の下かけ